

## サイアム大学教養学部日本語コミュニケーション学科の会話主教材の 作成方針、流れおよび内容<sup>(1)</sup>

千葉真人、Vannita YOMNAK

### 1. はじめに

サイアム大学教養学部日本語コミュニケーション学科<sup>(2)</sup> (以下、「JFC」: Japanese for Communication)は2011年4月8日にタイ教育省高等教育委員会(สำนักงานคณะกรรมการการอุดมศึกษา)からカリキュラムを認可され、同年6月に第1期生21名<sup>(3)</sup>を迎えた。国際交流基金の調査(2013)によると、本学は2013年9月時点でタイ国内において日本語主専攻課程を持つ私立大学8校の1つである。そして、2015年5月に第1期卒業生9名を送り出す予定である。

名称に「コミュニケーション」という語を含む日本語学科はそれほど多くないであろう。JFCの場合は「そもそもコミュニケーションとは何か」、「学生のコミュニケーション能力を高めるにはどうしたらよいか」、「日本語母語話者(以下、「日本人」とタイ語母語話者(以下、「タイ人」)のコミュニケーション上の問題を解決するには何が必要か」といった「コミュニケーション」に対する関心を常に持ち続けるようにしたいという思いを込めているため、このような学科の名称にした。そして、学生生活においても将来仕事やそれ以外の場面でも、日本人と関わっていく上で語、文法、敬語やマナーなどを「知っている」だけではなく、いかに「適切に使える」ようにするかが重要だと考えた。そのため、JFC開設の際にカリキュラムの目的として、「タイと日本の文化・習慣やタイ人と日本人の考え方・行動様式の違いを理解し、日本語を用いて適切なコミュニケーションをとることができる」ことを挙げた。

学生が「知っている」だけではなく、「適切に使える」ようにするためには、教室で学習したことをできるだけ実際の場面で使ってみることが重要である。しかし、JFCの学生が本当に話したいと思うであろう状況や話す必要がある状況を扱った会話教材は管見の限りなかった。そこで、JFCの目的に沿った会話教材を作成すべく、2011年3月に学科新設時の教員による教材作成会議(週3回程度)を開始し、2011年6月の開講より試作版を使用し始めた。当然新たな試みの全てが成功しているわけではない。しかし、第1期卒業生(現4年生)が生まれるのを機に、私たちがどのように教材を作成してきたかという試行錯誤の過程を公開し、使用してきた教材の一部ではあるがその妥当性を検証することは意義があるのではないかと考える。

本稿ではまず第2章でJFCの会話主教材作成方針と流れおよび教材内容の概要を紹介する。そして、第3章でその会話主教材を使用した科目の学習活動の一環として第1期生が2年生のときに行ったホームステイ活動について報告し、教材の妥当性を検証する一助としたい。

## 2. 『タイ人大学生のためのコミュニケーション用日本語シリーズ』とはどのような教材か

### 2.1 『タイ人大学生のためのコミュニケーション用日本語シリーズ』作成の方針と流れ

『タイ人大学生のためのコミュニケーション用日本語シリーズ』作成の方針は基本的に野田 (2005: 18-19) に基づいている。つまり、「聞く・話す・読む・書く、それぞれの文法を別々に作る」、「コミュニケーション活動が成功することを目的として、教える文法項目を選ぶ」、「相手の感情を害する誤用を重視したり、コミュニケーションのストラテジーを重視するなど、相手とのコミュニケーションに直接関わる伝達部分や社会言語的な能力を重視する」、「文法形式が先にあり、それを使う場面を作るという方向ではなく、コミュニケーションの目的が先にあり、その機能を果たすための文法を作る方向にする」といった方針である。この方針を JFC にあてはめると、「JFC の学生が実際に出会う状況に応じて適切に、日本語で、相手に不快感を与えることなく、自分が伝えたいことや伝えなければいけないことを伝え、かつ相手が伝えたいことを理解できるようになるためには何をどのように教えたらいいか」を考えながら教材を作成することになる。

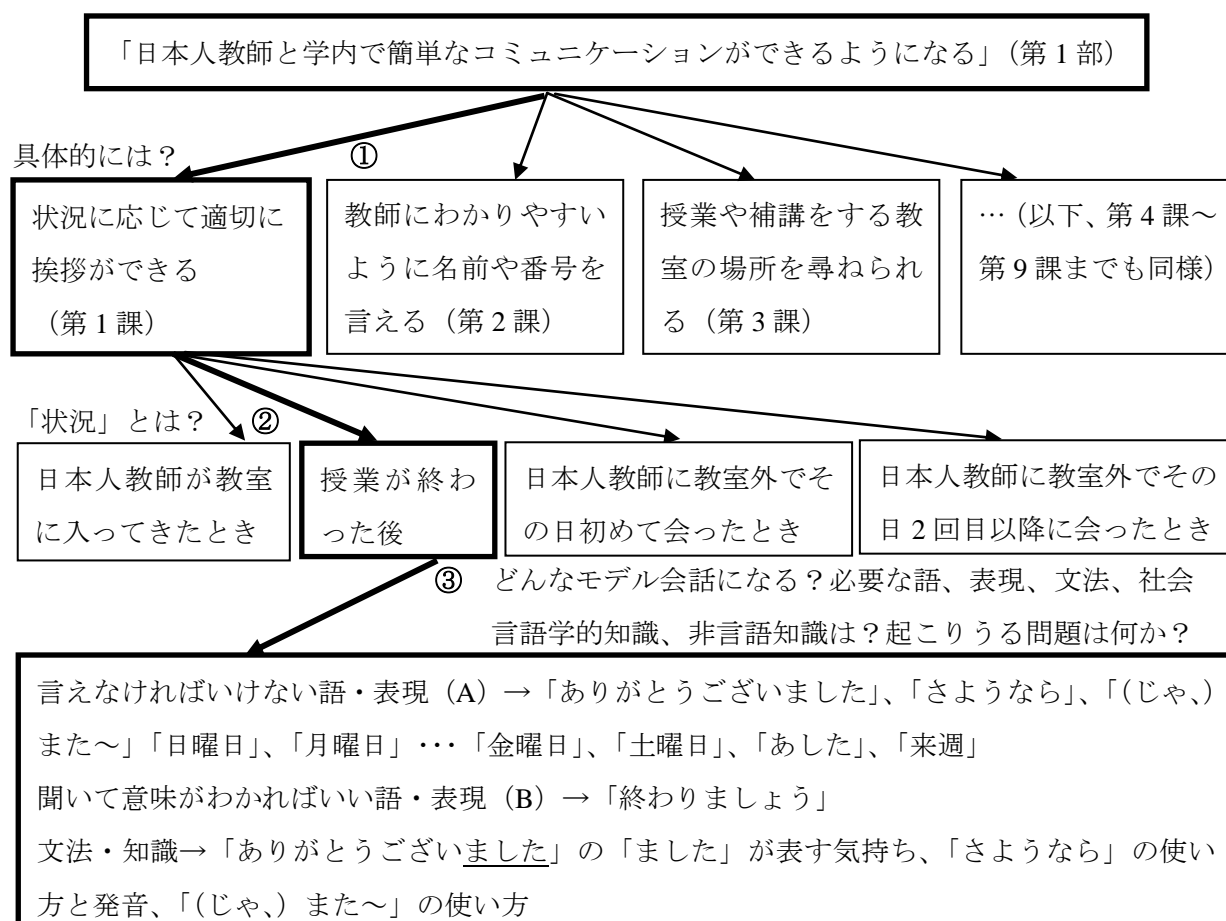


図1 教材作成の流れ (第1課 1-1-2 の例)

例えば、1年生の1学期は「第1部」として「日本人教師と学内で簡単なコミュニケーション

ができるようになる」(概要は2.3表1参照)および「第2部」として「日本から来た学生と学内で簡単なコミュニケーションができるようになる」(2.3表2参照)ことを目標とした教材を作成した。これは、JFCの学生が一番頻繁に会う日本人が学科内の日本語教師であり、次に頻繁に会うのが日本からサイアム大学に各種研修、日本語教育実習、交流活動や留学等で来る日本の大学生だからである<sup>(4)</sup>。

ここで教材作成の流れを第1部の1-1-2を例に説明する(前ページ図1)。まず、学生が「日本人教師と学内で簡単なコミュニケーションができるようになる」ために必要なことをさらに細かく、「状況に応じて適切に挨拶ができるようになる」(第1課)、「教師にわかりやすいように名前や番号を言う」(第2課)などに分ける(図1の①)。次に、第1課であれば「状況に応じて」とは具体的にどのような「状況」があり得るか、教師の過去の経験から選ぶ。結果として「日本人教師が教室に入ってきたとき挨拶する」、「授業が終わった後に日本人教師に挨拶する」、「教室の外で日本人教師にその日初めて会ったとき挨拶する」、「教室の外で日本人教師にその日2回目以降に会ったとき挨拶する」に分けられた(図1の②)。さらに「授業が終わった後に日本人教師に挨拶ができる」ようになるためのモデル会話を作り、必要な語・表現、文法、社会言語学的知識、非言語知識が何であるかを過去の経験から選び出す(図1の③)。その際、選んだ語・表現がこの段階で学生が「言えなければならない」語・表現であればそれを「新出語・表現A」として、「正確に言えなくても、聞いて意味がわかれば十分な」語・表現であればそれを「新出語・表現B」として提示する。図1の例で言うと、学生は実際の授業の曜日に合わせて「また、来週」や「また、金曜日」などと言えなければならないので、これらの「日」を表す語は「新出語・表現A」として提示した。しかし、「終わりました」は教師の発話であり、学生が言えるようになる必要はないので「新出語・表現B」として提示した。AとBを分けたのは、コミュニケーションの目的のために何が必要かを明確に示し、可能な限り学習の負担を少なくしたいと考えたためである。

なお、教材の難易度の設定であるが、基本的に1年生から4年生までの間に「身近なところから徐々に外の世界へ広がっていく」形になっている。つまり、場所は「大学内→大学外→日本」、話す相手である日本人は「サイアム大学の日本人教師→サイアム大学に来る日本人学生→大学外のタイ在住日本人→日本に住んでいる日本人」、話題は「具体的/個人的(毎日の生活、自分の勉強、家族、趣味など)→抽象的/社会的(タイの気候、タイと日本の違い、ニュース、お参りの際の行動の意味など)」のように広がっていく。第3章で述べるホームステイ活動は学生が「大学外に出て、教師や学生ではないタイ在住の日本人を相手に、抽象的・社会的な話題でも少しずつ話せるようになる」ことを目指している段階にあったことになる。

## 2.2 『タイ人大学生のためのコミュニケーション用日本語シリーズ』の構成

各課はそれぞれセクション・小セクション(以下、「(小)セクション」)に分かれている。各(小)セクションは基本的に「考えよう」、「会話」、「新出語・表現A」、「新出語・表現B」、「解説」、「練

習」という構成となっている。ただし、各課の最初の(小)セクション冒頭には「この課の目標」、  
 「自己評価シート」が、また各課の最後の(小)セクションの結尾には「まとめ」がある。

「この課の目標」はその課を勉強し終わったときに、何ができるようになるかを示したものであり、基本的には「〇〇ができるようになる」という形で提示されている。「自己評価シート」はその課を勉強する前に、学生が日本語で何ができ何ができないかを明確にしておき、その課を勉強し終わったときに何がどのくらいできるようになったか知るための資料である(図2)。授業ではまず「この課の目標」を明示した上で、学生はその時点での自己評価をこの部分に記入させる。その際、「今はできなくてもかまわないが、この課を勉強したらたぶんできるようになる」などと励ます。そして、その課の学習が終わった時点で別紙形式にて配布し、もう一度同じ評価をさせる。つまり、勉強前と勉強後で比較させ、「以前はできなかったことがかなりできるようになった」などと学生に達成感を与えるようにする。

★自己評価シート ใบประเมินตนเอง					
今あなたは日本語で以下のことがどのくらいできますか? 1つ選んでチェックしてください。ここでの「先生」は日本人の先生を意味します。					
ขณะนี้คุณสามารถทำสิ่งที่ยากต่างโดยใช้ภาษาญี่ปุ่นได้ประมาณเท่าไร? จงเลือก ๑ ข้อ และใส่เครื่องหมาย ✓					
อันึ่ง "อาจารย์" ในที่นี้หมายถึงอาจารย์ชาวญี่ปุ่น					
		できる ทำได้	だいたい できる พอทำได้	あまり できない ทำไม่ค่อยได้	全然 できない ทำไม่ได้เลย
1	先生が教室に入ってきたとき挨拶できますか? เมื่ออาจารย์เข้ามาในห้องเรียน คุณสามารถทักทายได้หรือไม่?				
2	授業が終わった後、先生に挨拶できますか? หลังเลิกเรียน คุณสามารถทักทายกับอาจารย์ได้หรือไม่?				

図2 自己評価シートの例(第1課から抜粋)

「考えよう」はその(小)セクションを勉強する前に、学生自身や周りのタイ人がある状況でどのように考え、行動しているかについて振り返る。そして、タイ人と日本人のコミュニケーション上にどのような問題があり、それをどう解決していけばよいか意識できるようにするためのものである。また、2.1でも述べたように「新出語・表現A」はその(小)セクションで覚えて言えるようにならなければならない語・表現であり、「新出語・表現B」はその(小)セクションで聞いて意味がわかるようにならなければならない語・表現である。ある段階では「新出語・表現B」に入っているが後の段階で「新出語・表現A」に入る(いずれは言えるようにならなければならない)語・表現もあるし、ずっと「新出語・表現B」のままである(聞いて理解できるだけでよい)語・表現もある。「解説」はその(小)セクションで新しく勉強する文型、語や表現についての解説である。日本語でコミュニケーションする上で大切なマナーや態度など社会言語学的知識、ジェスチャーや声の調子などの非言語的な知識についての解説もするようにしている。

### 2.3 『タイ人大学生のためのコミュニケーション用日本語シリーズ』2年生までの内容

後述する(3.1)ようにホームステイ活動は2年生のときに行った。そこで、この節では2年生までの学習内容を紹介する。紙幅の都合上第3部と第4部のみ詳細な内容を紹介し、第1部と第2部については概要のみを紹介する。

表1 第1部(第1課～第9課)および第2部(第10課～第13課)の内容

<b>第1部</b> 第1課 挨拶する	第6課 予定(時間や曜日)について話す
第2課 名前や番号を言う	第7課 依頼をするためにアポイントメントを取る
第3課 部屋の場所を尋ねる	第8課 断りを入れる
第4課 教材をもらう	第9課 わからないことばに対処する
第5課 教材を買う	
<b>第2部</b> 第10課 自己紹介する	第12課 タイ料理について説明する
第11課 大学を案内する	第13課 観光地を紹介する

第1部と第2部の目標と学習時期に関しては前述した(2.1)。第3部は1年生2学期の初めの約12週間で「タイに住んでいる日本人と、自分や相手の今の生活、家や家族、余暇活動や好みなどの話題で話せるようになる」ことが目標である。具体的な状況設定は「ホストファミリー(以下、「HF」と表記)になるであろう日本人との顔合わせでお互いがどんな人間であるかを知る／知ってもらい、実際にホームステイに行き一緒に何ができるかを検討する材料にする、食べられないものについて知ってもらい」などである。

表2 第3部(第14課～第18課)の内容(カッコ内は小セクション)

<b>第14課 今の生活について話す</b>	14-1 タイ滞在について尋ねる／14-2 仕事や勉強について尋ねる(14-2-1 どんな仕事をしているか尋ねる／14-2-2 どこで仕事や勉強をしているか尋ねる／14-2-3 休みや勤務時間・授業の時間を尋ねる／14-2-4 通勤・通学方法や時間を尋ねる／14-2-5 仕事や勉強の感想を尋ねる)／14-3 自分の勉強について話す(14-3-1 日本語を勉強した期間を言う／14-3-2 日本語の勉強についての感想を言う／14-3-3 日本語を勉強している理由を話す／14-3-4 休みや時間割について話す／14-3-5 通学について話す)
<b>第15課 家・家族について話す</b>	15-1 家について話す(15-1-1 どこに住んでいるか話す／15-1-2 誰と住んでいるか話す)／15-2 家族について話す／15-3 出身地について話す(15-3-1 相手の出身地について尋ねる／15-3-2 自分の出身地について話す)
<b>第16課 余暇や趣味について話す</b>	16-1 余暇の過ごし方について話す(16-1-1 余暇の過ごし方について尋ねる／16-1-2 余暇の過ごし方について言う)／16-2 趣味について話す(16-2-1 相手の趣味について尋ねる／16-2-2 自分の趣味について言う)／

---

16-3 一緒に余暇を過ごすことについて話す (16-3-1 余暇の過ごし方の提案を受ける/16-3-2 余暇の過ごし方を提案する)

---

**第17課 食生活について話す** 17-1 どんなものを食べているか尋ねる/17-2 自分の食生活について話す

---

**第18課 話を終える**

---

第4部は1年生2学期から2年生2学期にかけて25週間程度学習し、「タイに住んでいる日本人と大学の外で、天気や気候のこと、待ち合わせ場所までの移動手段のこと、タイの野菜の調理法、果物の選び方、タイで起こったニュースやお寺でのお参りの方法などの話題で話せるようになる」ことが目標である。

表3 第4部(第19課～第33課)の内容(カッコ内は小セクション)

---

**第19課 ホストファミリーと待ち合わせ場所で会う** 19-1 お世話になる挨拶をする/19-2 初対面のホストファミリーを紹介される/19-3 初対面のホストファミリーに自己紹介する

---

**第20課 ホームステイ先まで移動を始める** 20-1 天気・気候・季節について話す(20-1-1 気温についての感想を言う/20-1-2 季節について話す/20-1-3 気温が何度ぐらいか話す)/20-2 待ち合わせ場所までの移動について尋ねられる/20-3 待ち合わせ場所から家までの移動について尋ねる

---

**第21課 ホームステイ先までの移動中に話す** 21-1 初対面のホストファミリーについて詳しく話す/21-2 大学や勉強について尋ねられる/21-3 どこかに寄ってから家まで行くかどうか話す/21-4 今見えているものや状況について話す

---

**第22課 一緒に映画を見る** 22-1 行動の頻度について話す/22-2 どんな映画を見るか話す/22-3 映画のチケットを買う/22-4 上映時間までの過ごし方について話す

---

**第23課 一緒に外で食べたり、飲んだりする** 23-1 食べる物や飲む物を選ぶ/23-2 食べる前の挨拶をする/23-3 タイと日本の違いについて話す/23-4 心配する/23-5 恋愛について話す

---

**第24課 一緒に買い物しながら話す** 24-1 車を降りる/24-2 商品について話す(24-2-1 商品の名前を尋ねられる/24-2-2 商品についての意見を求められる/24-2-3 商品について尋ねる)

---

**第25課 ホームステイ先に到着する** 25-1 家に入る/25-2 手土産を渡す

---

**第26課 家の中のことについて説明してもらう** 26-1 どこに何があるか教わる/26-2 ものの使い方を教えてもらう/26-3 してもよいことや気をつけたほうがよいことを言われる

---

**第27課 観光に行く相談をする** 27-1 以前話したことを確認する/27-2 案内を依頼される/27-3 行き方を説明する/27-4 時間について尋ねられる/27-5 出発時間について尋ねる

---

**第28課 料理の作り方について話す** 28-1 いつ何を作るか話す／28-2 料理の作り方を教えてもらう

**第29課 自然災害について話す** 29-1 タイで起きた災害について事実を話す／29-2 タイで起きた災害に関する感想、希望や予想などを述べる／29-3 日本で起きた災害について事実を尋ねる／29-4 日本で起きた災害について意見や感想を述べる

**第30課 ニュースを見ながら話す** 30-1 日本語のニュースを見ながら話す (30-1-1 事故などのニュースについて話す／30-1-2 有名な人について話す／30-1-3 何のニュースか尋ねる)／30-2 タイ語のニュースを見ながら話す (30-2-1 タイで起きた事故などのニュースについて話す／30-2-2 スポーツのニュースについて話す)

**第31課 寝る前・起きてから** 31-1 何かしたいことを言う／31-2 寝る前の挨拶をする／31-3 起きてから

**第32課 お寺で話す** 32-1 お参りのしかたを説明する／32-2 行動の意味を説明する／32-3 人によって違うことを説明する

**第33課 別れる** 33-1 外出先で別れる／33-2 ホームステイ先やその近くで別れる

表4に、学生がこの教材を使用して学んだ科目名や内容などを記す(表中「L～」は「第～課」を表す)。サイアム大学の授業は1コマ50分に設定されている。下記のいずれの科目も週100分(2コマ)×2回の授業を15週間行った。つまり1科目あたりの1学期の学習時間は約50時間ということになる(200分×15週=3,000分)。授業は基本的にタイ人教師と日本人教師が同時にクラスで教える形式のチームティーチングで、構成内容の全ての部分で二人の教師が協力しながら授業を進めた。なお、2年生2学期の「日本語会話3」では、第4部の内容(第33課まで)が終わった後、引き続き第5部(留学先の日本での生活)の一部(第34課～第38課)を学習する。

表4 各科目の履修時期、名称と学習内容

履修時期	科目名	内容	履修時期	科目名	内容
1年生1学期	基礎日本語1	L1～L13	1年生2学期	日本語会話1	L14～L20
2年生1学期	日本語会話2	L21～L30	2年生2学期	日本語会話3	L31～L38

### 3. ホームステイ活動

#### 3.1 活動の概要

以下、「HF」とは「学生を受け入れてくれた家族全体」を指し、「HF代表」とは「HFの中で顔合わせに参加してくれた、事後アンケートに回答してくれた、家族の中の構成員」を指すこととする。

活動の時期は2013年1月～3月で、対象学生は第1期生(当時2年生)10名(男子1名、女子9

名)、HF 代表は JFC 学科長の個人的な知り合いを通じて協力を申し出てくれたバンコク在住日本人 10 名 (30 代~70 代女性。うち 5 名が子供と同居) であった。学生の目的は日本留学前<sup>(5)</sup> に日本人との生活を実際に体験し、友達に頼らずに自分一人で日本語によってコミュニケーションを取る能力を伸ばし、同年代以外の日本人との人間関係構築能力を伸ばすことであった。また、教師の目的は作成した教材の妥当性を検証し、問題点がある場合は今後の改善につなげることであった。

日程であるが、2013 年 1 月 14 日・15 日の 2 日のうち、HF 代表に都合がいいどちらかの日にサイアム大学に来てもらい、1 対 1 で顔合わせや予定の打ち合わせなどをしてもらった。ホームステイそのものの日程に関しては、HF と学生の都合が合う任意の 1 泊 2 日とした。結果として最も早かった学生が 1 月下旬、遅かった学生が 3 月中旬となった。また、学生に関してであるが、大学入学時点での既習者は 4 名、未習者は 6 名である。活動参加時点での日本語関係の履修済・履修中科目は 13 科目であったが、そのうち日本語の運用に関する科目は会話 4 科目、読み書き 3 科目およびコンピューターの日本語 1 科目の計 8 科目<sup>(6)</sup>、その総学習時間は約 400 時間であった。

### 3.2 活動後の質問紙調査の結果

#### 3.2.1 HF 代表に対する質問紙調査の結果

活動終了後に HF 代表に対して質問紙調査を行った。調査の目的は作成した教材の妥当性を検証することである。調査の方法はメールに質問紙を添付し HF 代表に送付し、回答後にファイルを添付し返信してもらう形式である。最終的に HF 代表 10 名中 8 名からの回答を得た (有効回答率 80.0%)。

表 5 ホストファミリー代表に対する質問と 5 段階尺度による回答の平均値および標準偏差

質問項目	平均値(SD)
③あなたが言ったことをきちんと聞いて、適切な応答をしていましたか	4.86(0.38)
⑤学生は礼儀正しかったですか	4.86(0.38)
⑥学生があなたやご家族と話すのにはふさわしくない言葉づかいはありませんでしたか？	4.86(0.38)
④あなたが言ったことがわかっていなそうなとき、適切な対応 (聞き返す、わからないという顔をする、そのことばを書いてもらうなど) をしていましたか	4.71(0.49)
①学生とは日本語でコミュニケーションを取ることができましたか	4.57(0.53)
②学生が何を言っているのかわからなくて、困ったことはありましたか (初めはわからなくてもジェスチャー、絵、写真、英語などを使って、最終的にわかった場合は除きます)	3.86(1.46)

表 5 に、質問項目のうち 5 段階尺度による回答を得たものの平均値と標準偏差を示した。質問項目の前の丸数字は質問紙中の番号を表しており、回答の平均値が高い順に並べてある。いずれ



の質問項目も数値が高い方がよい評価となるように作成してある。例えば、表中②や⑥の質問には「5.全然なかった」～「1.よくあった」という尺度で回答を求めた。なお、回答者は8名と少ないが、記述統計量を分析の参考とする。また、自由記述による回答の一部は後述する。

表中の6つの質問項目は2.1で述べた『タイ人大学生のためのコミュニケーション用日本語シリーズ』作成方針の、それぞれ以下のものに相当する。「JFCの学生が実際に出会う状況に応じて適切に、日本語で(①)、相手に不快感を与えることなく(⑤、⑥)、自分が伝えたいことや伝えなければいけないことを伝え(②)、かつ相手が伝えたいことを理解できる(③、④)ようになる」である。質問②を除きいずれも平均値が4.50以上と高い数値を示しており、学生に習得してほしいと考えている能力が期待通り習得されていると言える。また、6項目中唯一平均値が4.00を下回っている質問②もそれほど問題ではないと考えられる。なぜなら、この質問に対する選択肢の設定が「5.全然なかった～4.ほとんどなかった～3.あまりなかった～2.ときどきあった～1.よくあった」であるからである。この平均値(3.86)を見る限り、「ほとんどなかった」と「あまりなかった」の間に位置しておりさほど深刻な問題であるとは言えない。ただし、標準偏差が1.46と比較的大きな数値になっていることから、話し手としてのコミュニケーションストラテジー(CS)をある程度習得している学生とそうでない学生に差があったことが示唆される。Dornyei(1995:78-80)が指摘しているようにCSの教授可能性(teachability)にはまだ議論の余地があり、またCSの教育も段階を踏んで行うものだとされている<sup>(7)</sup>。教材で扱い、練習をしたからといってすぐに習得できるとは限らない。この点が表5のような結果を生んだと考えられる。なお、学生が使用した話し手としてのCSの内容を自由記述で回答してもらった結果、「ジェスチャー、英語、携帯電話の翻訳ソフト、タイ語、辞書」などの回答が得られた。

### 3.2.2 学生に対する質問紙調査の結果

活動終了後学生に対しても質問紙調査を行った。調査の目的と方法は3.2.1と同様である。活動に参加した学生10名全員から回答を得た(有効回答率100.0%)。まず、「教科書で勉強して役に立った内容は何か」という質問に自由記述で回答してもらった結果であるが、「挨拶、家の入り方、聞き取れなかったときの対処法、車に乗る前のことば、靴の脱ぎ方、のどが渴いたときの言い方、一緒に料理を作る方法、家の中の案内、日本料理レストラン、日本留学アドバイス、お寺での話し方、食事前の挨拶、日本語のニュースを見て何のニュースか尋ねる、朝何時に起きたらよいか尋ねる、手土産の渡し方」など、ほとんどの内容が有益だったとの回答が得られた。次に、「教科書にはなかったが、勉強しておいた方がよかった内容があるか」どうか尋ねたところ、「日本人と電話で話す方法、「ありがとうございます」以外のお礼の言い方」という回答があった。

## 4. まとめ

以上の結果から、JFCの新たな試みである「実際に必要となるコミュニケーションの目的の

ために何をどのように教えるか」を考慮した会話主教材は第3部と第4部においてはかなり効果をあげていると言える。ただし、話し手としてのCSの使用には個人差が見られたことから、今後これをいかにして使えるようにしていくかが一つの課題であると言えよう。また、第3部と第4部以外の妥当性をどう検証していくかも今後の課題としたい。

さらに、第2期生以降は学生数が増えてきたため、HFを探ることが難しく、ホームステイ活動を行うことができていない。これでは「実際に会う状況に応じて」という教材の重要な特徴が活かされず、やや形骸化してきている感は否めない。いかにしてHFを探し協力してもらえるか考える必要がある。それが無理なのであれば、現時点で学生が会う状況に合わせて教材の内容を修正する必要があるかもしれない。これらの点も今後の課題としたい。

## 注

- (1) 本稿は2014年8月16日にタイ国日本語教育研究会第219回月例会において口頭発表した「バンコク在住日本人家庭におけるホームステイ活動の報告」に加筆・訂正したものである。
- (2) タイ語名は「ภาควิชาภาษาญี่ปุ่นเพื่อการสื่อสาร คณะศิลปศาสตร์ มหาวิทยาลัยสยาม」である。
- (3) 授業登録をしたのみで全く姿を見せなかった学生が3名含まれている。
- (4) JFCは2015年3月現在、日本の大学6校と大学間協定を結んでいる。2014年度は非協定校も含めると11校から46名の大学生・大学院生がサイアム大学を訪問または滞在した。
- (5) 第1期生（現4年生）は全員が大学間協定を利用して、2013年4月から日本へ留学した。つまり、ホームステイ活動を行ったのは日本へ留学する直前であったことになる。
- (6) 残りの5科目（「日本文化」など）は日本人とコミュニケーションを取るために有益な知識を得るための科目として開講されている。しかし、主に知識を得るための科目であり、講義の大部分もタイ語で行われているため、日本語の運用に関する科目としては含めなかった。
- (7) Dornyei (1995:63-64)はCS教育の段階として「CSの性質や潜在力に気づかせる」、「間違いを恐れずにCSを使用することを奨励する」、「CSのモデルを示す」、「CS使用に関する文化的な差を強調する」、「直接CSを教える」、「CS使用の練習機会を与える」の6段階を挙げている。

## 参考文献

国際交流基金「日本語教育国・地域別情報 2013年度 タイ」『国際交流基金』

< <http://www.jpff.go.jp/japanese/survey/country/2013/thailand.html#JISSHI> > 2015年2月25日  
野田尚史（2005）「コミュニケーションのための日本語教育文法的设计図」『コミュニケーションのための日本語教育文法』、pp.1-20、くろしお出版

Dornyei Zoltan. (1995) On the Teachability of Communication Strategies. *TESOL Quarterly*, vol.29, no.1, pp.55-85